

「雍正篡位」再論

楊 啓 樵

1

「雍正篡位」は清代政治史上の一大事件であり、「太后下嫁」、「順治出家」と合わせて三大公案と呼ぶ。いわゆる篡位とは、康熙帝玄燁の死後、雍正帝胤禛が不正な手段で帝位を奪ったことを指す。

胤禛は篡位したのかどうか、話せば長くなるが、私は先ず結論を話そう。これは判断しがたい問題であると私は思う。彼の帝位継承は確かに若干の疑問を残したが、篡位を証明する確実な証拠に欠けている。言い換えれば、これに関する史料はほとんど存在せず、解決の可能性は極めて難しいと思う。

この問題について、六年前に出版した拙著『雍正帝及其密摺制度研究』（香港三聯書店、一九八一年）で、二章・五万余字の紙面を

費して検討したことがある。私は主として篡位説の矛盾や不合理な箇所を批判したが、胤禛の即位が合法であるとは肯定しなかった。私がそのように書いた訳は、当時篡位説が絶対的優勢を占めて、既に定説のようになっていたからである。しかし、これらの学説は牽強附会の箇所があると感ずるからこそ反論を提出したのである。拙著が世に出るや、書評を書いたり、拙文を引用する学者がいて、予期していたよりも反響が大きかった。だが若干の誤解も引き起こし、私を篡位説の反対派の範疇に入れた人もいるが、それは私の真意に合わない。私は胤禛の継位は何ら疑問がないと主張しているのではなく、ただ篡位説の中に論を尽さず、事実でないところがあって、他人を信服させたいと考えたのである。先ずそういった史実に符合しない点を駁正して、始めて更に進んで継位が合法か否かを検討できる。これはその当時の考えであり、

現在も同じである。

雍正篡位は興味本位の問題であるとか帝王家の内部紛争であるとかいうことのみならず、清代政治史上にあっても、極めて重要な位置を占めている。たとえば、康熙帝の晩年、諸皇子がそれぞれ党派を立て、明に暗に鬭争した局面、胤禛が即位の後、次第に政敵を肅清した情況、その結果として情報網を張りめぐらしたと、史料を改竄したことは、一つとして篡位説と無関係なものはないので、深く研究するに値する。

2

本題に入る前に、康熙朝の太子の目まぐるしい廃立の経緯を説明すべきであろう。

康熙帝玄燁には全部で三十五人の息子二十人の娘があった。息子のうち成人にまで育ったものは二十四人、娘は八人いた。康熙四十七年(一七〇九)に最初に太子を廃した時には、二十歳以上の息子は十四人しかいなかった。

玄燁の最初の息子は康熙六年九月に生まれ、承瑞と名付けられた。以後の二人の息子とも承の字を名前の一文字目に用いた。この三人は皆夭折したので、四人目は思い切って賽音察渾という満洲名をつけたが、やはり間もなく死んだ。続いて生まれたのは保

清という。上の何人かの兄は夭折したので、彼が長男となり、満洲の宮廷の習慣によれば大阿哥と称するのである。その下は、太子允禔であり、皇子長華・長生・万麒である。この数人の男児中、生存したのは保清と允禔だけである。

允禔は六番目の息子であったが、上に述べた五人の兄のうち四人は死んだので、二阿哥と称する。彼が生まれてから、皇子達の名は統一された。即ち上の一字は胤であり、下の一字は示偏しへんのものである。ただ大阿哥は例外であったが、康熙二十七年頃、保清も胤禔と改名した。雍正帝胤禛が即位して一箇月後、康熙六十一年十二月二十日、封建習俗に従って、彼の兄弟達は避諱せねばならず、名前の上の一字の胤を允に改めた。それで史書に現われるものは皆改正後のである。たとえば、長兄は允禔、二兄は允禔などのように。ただ皇帝一人だけは、もと通り原名の胤禛を用いた。文章を書く時、皇子たちの名を、皆胤字に復したり、あるいは改名の前には胤を用い、改名後は允を用いる学者もいる。これも道理ではあるが、混乱するので、本稿は皆允の字に書く。

允禔は康熙十三年五月三日(ここでは皆陰曆を用いる。)に生まれた。彼の生みの母は孝誠仁皇后である。允禔は彼より二歳上であるが、その母は側室の恵妃であったので、太子とはなれなかった。允禔は生後二歳にならないうちに、太子に冊立された。時に康

熙十四年十二月十三日である。満洲王室には儲君を立てる習慣がなく、その上、帝位継承者は必ずしも嫡男ではない。二十二歳の年若い康熙帝は、突然太子を冊立し伝統を破った。これは満洲王朝史上初めてのことであった。玄燁も含めて、これ以前帝位の継承は既に三度あったが、いずれも帝王の死後、皇族と大臣達によって推挙されたが、今何故彼はさし迫って太子を冊立したのであろうか。多分以下のいくつかの原因があろう。

一、漢に入って俗に従ったこと。清朝は中原の主となったが、関外の一地方政権時代とは比べものにならないほど政治機構が拡大し、儲君を立てることは、中国における伝統的な政治の要務であった、満清王朝を固め一家独占の天下を万世に伝える大事業のために、当然太子を立てる必要があったのである。順治帝は山海関に進入した第一の天子ではあったが、二十四歳で夭折した。この使命は漢民族文化の深い薰陶を受けた玄燁の肩にかかったので、嫡男の允禩が生後間もなく太子に冊封されたのも道理に叶った穏当な事である。

二、摂政・輔政の勢力の排除。その当時、順治帝は六歳という幼児の身で即位したが、実権は摂政王多爾袞の掌中にあった。康熙帝が帝位を継いだ時もわずか八歳であったので、四人の大臣により輔政された。その中で察拝の権勢が最も強く、最初の数年間、

皇帝は實際上、傀儡に過ぎなかった。康熙六年玄燁は親政した、道理からすると、彼自らが政治を執り行なうことができるのであったが、察拝の集団は依然権力を握って政権を返そうとしなかった。他の輔臣、蘇克薩哈は政権を皇帝に返すべきだと主張したが、察拝の怒りに触れ、罪名を勝手に押し付けられて、死罪に処された。二年後、玄燁が終に一計を案じて察拝を捕え、九年間の輔政政治を終えたのであった。

玄燁はこういった悲惨な教訓が自分の子孫に重ねてふりかかるとを欲しなかったので、彼自身も当時僅か二十二歳であり、嫡男はまだ満二歳にもなっていないが、毅然として太子を冊封したのであった。

三、情勢の必要から出たこと。当時呉三桂らの三藩の乱が起って、政局は揺れ動いて落ちつかず、人心安定のためにも儲君を立てる必要があった。いわゆる「垂万年之統、系四海之心。」である。^①

四、「愛屋及鳥」のこと。太子の生母は四大輔政大臣の一人、索尼の孫娘である。索尼は察拝に対抗した時に皇帝の側に立った。それで皇后は寵愛を大いに得たが、允禩を産んだ時に死んでしまったので、この母の無い赤ん坊は、取り分け可愛いがられた。これも太子を冊立した一つの原因である。

① 《清聖祖實錄》卷五八、康熙十四年十二月丁卯。

3

玄燁は太子の教育に十分注意を払い、六歳で学問を始めさせ、名儒・宿学を招請して彼のために講義させた。允禛は漢文を習うばかりでなく、満文も治めねばならず、文事を学ぶのみならず、騎・射も練習せねばならなかった。正しく史臣が称讃するように「通滿漢文字、嫺騎射。従上行幸、廢熙斐然」であった^①。朝鮮の方でも評判になって、彼は八歳で左右の手で弓を引きしほり、「四書」を暗誦できたという^②。後、廃されたとはいえ、玄燁はやはり彼をほめてゐる。「騎射・言詞・文学、無不及人処」と^③。当时、宮廷で在職中のフランスの神父白晋はその著《康熙帝伝》で、允禛を次のように称讃している。

他那英俊端正的儀表、在北京宮廷裡同年齡的皇族中、是最完美無缺的。他是一個十全十美的皇太子、以致在皇族中、在宮廷中、沒有一個人不稱贊他。^④

しかし、允禛は大きくなるにつれ、次第に学習しようという気持がなくなつていったという。康熙二十五年五月、靈台郎の董漢臣の上奏文の中に「諭教元良」の陳情があつた。即ち皇帝にしっかりと太子を教育するようにということである。この年允禛はやつと十三歳で、名臣にして学者の湯斌と耿介が相いついで宮廷に

入り学を講じたが、董漢臣の上奏により、二人は咎を受け、耿介は官をやめ、湯斌は間もなく病死した^⑤。それ以来允禛は真面目に勉強しなくなつたという。

- ① 《清史稿》卷二〇、理密親王允禛伝。
- ② 朝鮮《肅宗実録》、八年（一六八二）一月乙卯。
- ③ 《清聖祖実録》卷三三四、康熙四十七年九月己丑。
- ④ 白晋：《康熙帝伝》、《清史資料》第一輯、頁二四二～二四三。中国社会科学院歴史研究所清史研究室編。
- ⑤ 《清史稿》卷二六五、湯斌伝。又《清史列伝》卷八。湯斌伝。

4

康熙時代は正に滿洲貴族が集団となつて政治を導いていった段階から、中央集権へ向う最後の時期であり、雍正時代になって、やっと完成を見た。中央集権を強化するため、玄燁は一方ではいろいろな措置を採つて貴族の専権を抑制し、一方では自分の息子たちをもちたて、彼ら自身に勢力をもたせ、玄燁が他の貴族・大臣に対処することについて援助できるようにさせた。しかし、彼の勝手な思わくははずれてしまい、康熙の晩年の一連の紛争が、皆彼の息子たちから起ころうとは予想もしなかつた。

教多くの息子たちの中で最も重視したのは、もちろん太子允禛であつて、玄燁は太子の声望を高めようと尽力し、儀礼上ほとん

ど自分と対等にした。たとえば、元旦・冬至などの節句には、諸王・大臣は先ず皇帝に朝賀し、それから太子に賀礼するというように^①。玄燁が自ら軍を率いて出征した時には、朝廷の政務は太子に処理させた。南下して巡幸した時にも、太子に扈從させた。これは政治実習と言うことができる。政治のやり方を学ばせ、ひとたび帝位を継いだ際、困らないようにしたのである。

允勅がまだ成人に達しない時、父子間の感情は融和していたが、段々と大きくなるにつれ、自ら一派を成し、自ずと権勢にこび近づくと群の輩が、彼のまわりを取り囲んで、小朝廷を形成した。老皇帝は日ごとに老衰し、先も短かいのに対し、太子は日が中天にあるように、前途遼遠であったから、当然允勅に取り入って、允勅は皇帝をも飛び越えることになり、終りには、皇帝の権力と儲君の権力との紛争を惹起することになった。

このような情況を造り出したことに、玄燁はもちろん責任の一部を負わなくてはならない。允勅に対して自由放任でありすぎた結果として、尋常の儀礼を逸脱したのであるから。一方、他人の挑撥による離間もある。先ほど允勅には一群の擁護者がいて、勢力が強大であると言ったが、この集團の頭目が大臣の索額図である。彼は輔政大臣索尼の息子であり、太子の生母・孝誠皇后の叔父でもあって、皇帝の信任を大いに受け、一門は勲功高い貴族で

あり、権勢は朝野を傾けた。彼の教唆により、政変を醸成せんばかりになった。

どうしてこのような緊張した情勢になったのであろうか。第一に太子の不徳である。後に太子を廃した時、玄燁は一一指摘して言った。

允勅不遵祖訓，惟肆惡虐衆，暴戾淫亂，難出諸口。

穆辱諸王・大臣、即平郡王納爾素・貝勒海善・公普奇，亦被鞭撻。

將蒙古進貢御馬，攫取為己有。

恣取國帑，干預國事。^②

こういった悪劣な行為を、玄燁はずっと隠して公にしなかったが、允勅が始めてやんわりとやられたのは、康熙二十九年七月のことであった。皇帝は遠征し、途中で病にかかったので、太子及び三阿哥允祉を行宮に召した。允勅は「聖体未寧、天顏清減」を見ても、少しも憂えなかつたので、「上不憚、遣太子先還」ということになった。^③

これはまだ小事であって、玄燁が最も望まなかつたのは、皇権に影響する太子の党派の出現であった。彼は言った。

朕出師寧夏後，皇太子聽信匪人之言，素行遂變。自此朕心眷

愛稍衰，置教人於法。^④

寧夏出兵した時は、康熙三十六年であり、この年允禛の使用人花喇等を処刑したが、これは太子の党人を除去する発端であると
言っている。

緊迫した状況を造り出した別な要因は、兄弟間の矛盾の表面化である。即ち玄燁が太子党を肅清した翌年、皇帝は諸皇子を王侯に封じた。大阿哥允禩は直郡王となり、三阿哥允祉は誠郡王となり、四阿哥胤禛(つまり雍正帝)・五阿哥允禩・七阿哥允祐・八阿哥允禩は貝勒となった。これらの皇子は名ばかりの肩書きを得たのではなく、各自が若干の佐領(軍隊と人民)を分配され、政治にも参与した。太子の権勢が輝かしい時には、皇子たちもまた本分を守っていたが、允禛が父の猜忌に遭うと、兄弟たちは儲君の位に取って代わろうと動き出した。太子は衆矢の的となり、各方面の中傷を受け、地位は極めて危かった。索額図は形勢が不利であり、皇帝に儲君変更の意図があるようにと見て取るや、允禛に政変を起こして早く政権を握むようにと教唆した。この計画は皇帝に知られ、玄燁は先に手を打ってこれを制した。康熙四十二年五月、索額図を捕えた。罪名は「議論国事、結党妄行」である。いわゆる「議論国事」とは、潜かに政変を謀ったことを指す。その結果、索額図は獄中に死んだ。長年経った後も玄燁はまだ余恨息まず「索額図誠本朝第一罪人也」と言った。^⑥

康熙四十七年九月、允禛は終に儲君を廃された。罪名の中で、行為に恨しみが無いという以外に、最も重いものは、允禛が索額図のために復仇しようとしたことであるという。玄燁は感情を激して言った、「今朕未ト今日被鳩、明日遇害、昼夜戒慎不寧」と。最後にきっぱりと言った、「朕之天下、断不可以付此人！」と。^⑦

索額図の二人の息子、格爾芬・阿爾吉善もまぎぞえを食って死刑に処せられ、その他の党人は拘禁されたり、盛京へ放逐されたりした。^⑧

玄燁は允禛の行為に対し、既に二十年も寛大な態度を取ってきたという。二十年前は康熙二十七年であり、允禛に学問の気持がなく、湯斌・耿介の両師が引責した時であるから、こうしてみると太子の素行不良は事実である。それでは、『実録』などの官書中の記載は、胤禛の捏造に出て、それによって兄を中傷し、自分の即位の正当性を証明しようというのであろうか。事実はそうではない。というのは允禛の悪名は早くに遠く海外まで伝わり、朝鮮史料の中に何度も彼を取りあげている。「性甚悻戾、多受賄賂」、「沉耽酒色」、「分遣私人於十三省富饒之処勒徵貨賂、責納美姝」、「締結不逞之徒、事々牟利、財産可埒一國」^⑨と。玄燁を最も耐えがたくさせたのは、允禛に「陰蒸諸妹」という人倫にもとる行為があったからである。これは恐らくいつわりではあるまい。という

のは太子を廢して五日後、玄燁は何名かの腹心に向つて允祜を非難して、自分は「從不令外間婦女出入宮掖、亦從不令姣好少年隨侍左右」であるのに、「今皇太子所行若此、朕實不勝憤懣」と言うからである。¹³⁾

① 王士禛：《居易錄》卷十七。

② 《清聖祖實錄》卷三三四、康熙四十七年九月丁丑。

③ 同上卷一四七、二十九年七月癸丑。又《清史稿》卷二二〇、理密親王允祜伝。

④ 《清聖祖實錄》卷三三五、四十七年十一月壬子。

⑤ 同上卷二二二、四十二年五月癸亥。

⑥ 同上卷二五三、五十二年二月庚戌。

⑦ 同註②。

⑧ 《清史稿》卷二二〇、理密親王允祜伝。

⑨ 朝鮮《肅宗實錄》、三十九年十一月丙寅。

⑩ 同上卷五二、三十八年十二月癸酉。

⑪ 同上卷五五、四〇年三月戊辰。

⑫ 同上卷四九、三十五年三月甲午。

⑬ 《清聖祖實錄》卷三三四、康熙四十七年九月壬午。

5

太子が廢されると、諸皇子が儲君の地位を狙い、王室内部の糾紛の幕は開かれた。允禩はこの地位を得たいと切望した。というのは、彼は長男であり、幼い時から父皇から寵愛を得ており、か

つて何度も父に従つて出征したり、巡幸したりしたからである。

康熙三十七年三月、早くも直郡王に冊封されている。同時に冊封を受けた者に三阿哥の允祉がいるが、彼は間もなく罪によって降職されたので、太子を除いて、当時多くの兄弟の中で允禩の爵位が最高であった。

太子が廢されると、彼は待ちかねて心を踊らせたが、すぐに玄燁に拒絶された。太子の罪を列挙して責めるのと同時に、特に次のような意見を出した。

朕前命直郡王允禩善護朕躬、並無欲立允禩為皇太子之意。：

…允禩秉性躁急・愚頑、豈可立為皇太子。^①

允禩は断念するしかなく、転じて当時最も人望のあった八阿哥の允禩を擁護した。彼は皇帝に進言した。人相見が允禩は必ず「大貴」になると言っています。また、廢太子の允祜を殺すのは、父である皇帝の手による必要はありませんと言ったので、玄燁は激怒し、乱臣賊子だと斥けた。^②

間もなく、三阿哥允祉が、允禩は蒙古のラマ僧に呪術を使って允祜を咒わ^③せていることを暴露した。康熙四十七年十一月一日、允禩は爵位を除かれ、王府に幽閉され、彼の政治生命は終り、雍正十二年（一七三四）獄中に死んだ。

康熙四十七年十一月十四日、玄燁は突然滿漢の大臣を召集し、

大阿哥以外に諸皇子の中から一人を推挙して太子にしようとして言った。「衆議誰屬、朕即從之」と。だが皆が八阿哥の允禩を推挙した時、玄燁は食言して言った。「八阿哥未嘗更事、近又罹罪。且其母家亦甚微賤」と。^⑤

王鍾翰教授の説によれば、この度の太子推薦で允禩が失敗したのは、すべて大学士馬齊一人にその因があるという。玄燁は嘗て言った、「今立皇太子之事、朕心已有成算」と。思うに康熙帝は允禩に望みをかけ、確かに既に胸中に成算があったのであろう。というのは馬齊はひそかに情報を諸王・大臣に伝え、允禩を擁立するようにしむけていたが、玄燁は太子擁立などの大権を握っており、他人の手に落したくなかった。かくして允禩の生涯の前途は馬齊一人の手により断ち切られたという。^⑥

私は、玄燁が大権を他人に帰することを望まなかったというのは正しいが、早くから允禩に惚れこんでいたのに、馬齊一人によって太子への道が断たれた云々というのは、まだ考慮する余地があると思う。当初、玄燁は諸臣が推挙する者は絶対に一名にとどまるまいから、こうしてその中より選ぶことができるものと思っていたが、允禩一人しか選出されないとはい思ってもよらなかった。「如此、則立皇太子之事皆由於爾諸臣、不由於朕也」と言い、允禩は「則在爾等掌握中、可以多方簸弄乎」と言った。^⑦

私が思うのに、公に推薦される前、允禩は必ずしも玄燁の心中唯一の継承者ではなかった。というのは、これより少し前、允禩は何度も父の譴責に遭っているからである。父皇は彼を「柔奸性成、妄蓄大志」、「謀害允禔」と責めて、彼をとらえ、議政大臣に審理させた。その時、十四阿哥の允禩は代わって懇願し、ながらもした。^⑧この事件は九月二十八日に起き、十月二日になって終に允禩から爵位を剝奪した。これより一日前に諸臣を論した、「八阿哥向來奸詐、爾等如以八阿哥係朕之子、徇情出脫、罪坐旁人、朕断不容」と。十月四日また諸皇子及び大臣たちを論した、「允禩自幼性奸心妄、其糾合党類、妄行作乱者有故」と。^⑨

允禩がこのような厳しい譴責を受け、しかも爵位をも剝奪されている以上、一箇月後、諸臣に太子を推挙させた時、玄燁の胸中に已に成算があると言って彼を儲君に立てると決定したというのは、道理上すじが通らないようだ。

だが王氏の論も全く理由のないことではない。というのは滿漢の大臣が一致して允禩を太子に推挙したのは、もちろん彼の才能・名声を考慮し、その上に皇帝の意図も予測したはずだからである。そうでなければ軽率に皇帝に憎まれている皇子を儲君にすることなどできないのである。それなら先ほど紹介した官書の悪評は一体どのように解釈すべきなのか。胤禩が帝位に登った後の捏

造なのか、もしそうであるなら、王氏の主張もまたすじが通ることになる。

しかし、疑問はやはり解決していない。たとい、あのような允禩に対する譴責は皆捏造に出るとしても、允禩が確かに四十七年十月二日貝勒を剝奪されたのは、偽りでない。更に重要な事は、滿漢の大臣が允禩を推挙した時、玄燁は受け入れなかったことである。もし皇帝が早くから允禩を太子に立てようという気持ちがあれば、たとえ馬齊に知られ、うわさが洩れたとしても大したことではなく、群臣の提案をきっぱりと拒絶する必要はない。その上、三箇月後になってもまだ、誰が最初に允禩の推挙を提唱したかを徹底して追跡調査し、最後には責めて言っている。

今馬齊・佟国維与允禩為党、倡言欲立允禩為皇太子、殊屬可恨、朕於此不勝忿恚。况允禩乃縲縶罪人、其母又係賤族。今爾諸臣、乃扶同徧徇保奏允禩為皇太子、不知何意。^⑩

一箇月ぐらい後、玄燁は突然また允禩を太子に立てると宣布した。廃されてまだ半年に過ぎず、子供のふざけであることを免れない。何年か後、玄燁は弁解した、「陰險な允禩を太子に冊立したくなかったからこそ、やむを得ず允禩を釈放し、その地位を恢復したのだ」と。^⑩

允禩が皇太子に立てなかった理由は、皇権と儲権の問題にかか

わっていると思う。允禩が廃されたのはまさしく太子の権力が父皇より強かったからである。今度は允禩が出現して、諸大臣が一致して允禩を推戴していることから、允禩の潜在力の強さが窺われ、皇権を脅かすのを父皇が恐れたことが、允禩が儲君に成りえなかった主因である。一方で玄燁は辛辣な言葉で允禩を痛罵しているから、允禩は父の欲心を得なかったのも事実であると分る。

- ① 《清聖祖實錄》卷三三四、康熙四十七年九月丁丑。
- ② 同上卷三三四、四十七年九月戊辰。
- ③ 同上卷三三五、四十七年十一月丙戌。
- ④ 王鍾翰：《清世宗奪嫡考実》、《燕京學報》第三六期、一九四九年六月。
- ⑤ 《清聖祖實錄》卷三三六、康熙四十八年一月甲午。
- ⑥ 同上卷三三四、四十七年九月壬寅。
- ⑦ 同上卷三三五、四十七年十月癸卯。
- ⑧ 同上卷三三五、四十七年十月丙午。
- ⑨ 同上卷三三六、四十八年一月甲午。
- ⑩ 同上卷二六一、五三年十一月甲子。

6

允禩は太子に返り咲いてから三年、康熙五十一年九月、再び廃された。これはもともと予想されたことである。最初に廃立された後、諸皇子が動き出し、儲君になろうと争って政局の不安を惹

起した。紛乱の局面を收拾し、拡大させないために、玄燁はやむを得ずまた允禩を立て、彼が、一度の打撃を経て反省し、邪を改めて正に帰るようにと希望した。しかし、允禩の気性はどのように改められようか。間もなくまた旧態がぶり返した。そして左右に一群の人々が集まり、新しい勢力を形成し、依然皇帝に対して脅威となり、皇帝の身の安全にさえ影響した。康熙五十年十月、玄燁は厳しい手段をとり、太子の党の巨頭数名を捕えた。歩軍統領托合齊は獄中に死し、「剝尸焚之」。刑部尚書齊世武・兵部尚書耿額は絞首刑となった。^①

康熙帝父子の争いにより、諸臣はそのはざままでびくびくとして不安であった。「兩処總是一死」という言葉があったほどである。何故このような言い方があるのか。玄燁の解釈によると、将来允禩に誅されても老皇帝に忠を尽したいという人もいるし、太子に身を寄せて迎合し党を結んで、「被朕知覺、朕即誅之者。此豈非兩処俱死之勢乎」ということである。^②

康熙五十一年十月、允禩は終に再度太子を廃された。玄燁は非常に悲しみ怨んで言った。「允禩」自釈放之日、乖戾之心即行顯露、……如此狂易成疾・不得衆心之人、豈可付託乎」と。^③

允禩は廃せられて拘禁され、彼の政治生命を終えた。雍正二年十二月、監禁された祁県の鄭家荘で死んだ。

① 《清史稿》卷二二〇、理密親王允禩伝。
② 《清聖祖實錄》卷二五一、五一年十月辛亥。
③ 同上。

7

太子が再び廃されると、儲君は棚上げしたままで決められなかった。諸皇子は儲君の地位への非望を抱き、それぞれが党派をたて互いに排斥し合った。最初允禩の人望が最も高かったが、群臣の推挙を受けるのに失敗した。この時允禩も監禁中であり、諸皇子の中の年長で実力のあったものは、允祉、胤禩と允禵の三名だけであった。

允祉は康熙十六年二月丁卯に生まれた。生母は榮妃馬佳氏であった。康熙三十七年早くも誠郡王に封ぜられたが、法に触れ貝勒に降された。康熙四十八年誠親王となった。太子と長兄の允禩とが相い離いで拘禁された後は、兄弟の順序から言えば彼が第一であった。早くから父の歡心を大いに得ていたので、彼は軍國の大事を処理するように往々命じられた。また玄燁が塞外へ避暑に行くたびに、彼も随従した。封建時代は祭祀を最も重視し、皇帝自身が行けなくなった時、代理人を派遣するが、その中で允祉と胤禩が代理した回数が最も多い。また允祉と胤禩は北京と熱河に花

園を下賜され、太子が廃されて後、兩人は何度もそれぞれ父皇を招請して花園に遊び、宴を設けて天倫の楽しみのために集った。

康熙帝は學術を好み、允祉に命じて律呂・算法などの書物の編纂をさせ、暢春園の蒙養齋を開き、多くの著名な學者を招聘した。そのうちの陳夢雷編の《圖書彙編》は、中國第二の大型の類書である。このことが胤禛に嫉妬心を抱かせ、即位してから真先に処分したのは陳夢雷で、彼は塞外に流謫された。書名も《古今圖書集成》と改めた。

総して言えば、允祉は頗る學問があり、父の寵愛も受けた。しかし、彼には大きな野心はなかったようで、政治活動に積極的には参加しなかった。後、胤禛が即位して允祉を懲罰した時、かつて太子廃立後、允祉が「以儲君自命」と言ったと胤禛は述べているが、この話は些か牽強に過ぎるようである。

① 《清世宗實錄》卷二、康熙六一年十二月癸亥。

② 《上諭旗務議覆》雍正八年。

8

允祉を除くと、残った太子候補者は胤禛と允禩の兩人だけであった。胤禛の条件はどうなのかをひと先ず見よう。彼にはどんな優れた点があって、父の歡心を得たのだろうか。以下數点を列挙

する。

一、生まれつき淡泊であること。胤禛は大變な野心家で、儲君に選ばれるようたくらんだが、表面はいかにも無欲のように見えて、允禩・允禩のように傲慢放縱ではなかった。諸皇子で儲君の地位を争っていた時、彼は僧侶と交際して禪義を議論し、あたかも権力に無関心のものであった。これが父の歡心を得た一つの理由であろう。というのは、康熙の晩年、太子の勢力の拡大は、君権に影響し、皇帝に警戒心を高めさせ、もし儲君を立てるならば、恬淡で野心がない人でなければならなかった。この点を胤禛は表面上やっていた。彼は以後何度も言っている、自分は天子の位には全く手を染める氣持もなかったと。彼は言う。

朕向者不特無意於大位、心実苦之。^①

また言う。

朕向日竝無希望大位之心、亦不効伊等當謀。^②

二、中立不偏。これも玄燁が繼承人を選出した一つの条件である。胤禛は自ら稱している、

朕在藩邸、……皇考深知朕中立不倚、斷無殺戮之事、是以命

朕繼承大統。^③

また言う。

朕登大位之先、不但朕之兄弟宗室、即八旗大臣官員、並無一

人と朕有仇。……朕在藩邸時、不特不與人結仇、亦不與人結党。^④

三、誠実で孝養をつくす人がらであること。父が太子廢立の件で病気になる、彼は痛哭して父に医者を呼び薬を飲むように陳情懇願し、自らも昼夜うむことなく傍に仕え、玄燁の歡心を得た。雍正七年の上諭の中で、「朕蒙皇考俯鑒惻忱、於衆兄弟中、惟許朕以誠孝二字」と述べている。^⑤

四、兄弟に友愛であること。胤禛のような暴君は、兄弟間に深く厚い情愛があるとは言いがたいが、彼は兄弟の中で適当にたちまわることができ、誰ともうまくいったようだ。彼は自ら称している。

朕在藩邸時、……衆兄弟待朕、亦皆恭順、不敢存欺慢之念、平日原無一毫嫌隙。^⑥

また言う。

朕自幼時、諸兄弟俱恭敬朕躬。朕於兄弟中、亦無私嫌。……豈但無仇隙、即此微一言之不合、亦未有也。^⑦

五、政治能力。胤禛は十九歳の時から、既に父に従って出征し、康熙三十五年玄燁が噶爾丹を親征する時、彼も随行した。以後政務に当るようになるが、全てみごとにやり遂げ、彼の政治手腕を証明した。

以上の五点は胤禛の長所である。

- ① 同上論内閣 雍正二年八月二十二日。
- ② 清世宗実録 卷十八、雍正二年四月庚戌。
- ③ 同上論内閣 雍正元年四月十八日。
- ④ 同註①。
- ⑤ 大義覺迷録 卷三、頁三一、清史資料 第四輯、一九八三年。
- ⑥ 清世宗実録 卷四十、雍正四年一月戊戌。
- ⑦ 同上。

9

允禔は康熙二十七年正月九日に生まれた。同母兄の雍正帝胤禛より十歳若い。このため彼の爵位及び政治活動は兄に遠く及ばなかった。最初、彼は力を尽して八阿哥允禩を擁護したが、允禩が失敗すると、自分が領袖になりたいと思つた。允禩・允禪・允禛らの諸兄は転じて彼を擁護し、康熙の末年、彼は人望絶頂の皇子とすることができた。ただ、官方の史料、あるいは胤禛の口中の允禔は非常に愚劣であつて、何度も彼のことを貶している、「賦性狂愚」、「素性嗜酒」、「又復漁色宣淫、不知檢束」、「平日素為聖祖皇考所輕賤、從未有一嘉予之語」^①と。

こういった中傷的性格をもつた史料を、私達はそのままのみにして信ずることはできない。それは丁度胤禛がどのように父の

寵を受け、諸兄弟に敬服されたか自讃したりするなどの語と同じ

ように、大幅に割引いて受けとらねばならない。允禩の仲間の允禔らは、彼を称讃して「聡明絶世」、「甚有義氣」といつている。^②

たとい官書であっても、彼の長所を一概に抹殺できない。二つの事件がこのことを証明するに足る。一つは康熙四十七年十一月一日、長兄の允禩は爵位剝奪され、所属の上三旗の佐領は皆允禩に与えられ、下三旗の鑲藍旗の佐領と渾托の人口の半分も彼に下賜された。^③二つめは、康熙五十七年三月、彼は貝子より級を超えて王となり、撫遠大將軍に任命され、青海の西寧に駐留し、チベットに侵入する準噶爾部隊に対処することになった。出陣式は特に盛大であった。康熙帝は青海の酋長に与えた聖旨の中で次のように称讃した。

大將軍（允禩を指す）是我皇子、確係良將、帶領大軍、深知有帶兵才能、故命掌生殺重任、爾等或軍務、或巨細事項、均應謹遵大將軍王指示。^④

当時太子は再度廃され、儲君はまだ決まっておらず、ある人達は允禩がこの特殊な使命を得た以上、太子に冊立される可能性があると考えた。允禩・允禔などの人は皆極力彼を擁護し、允禩自身も儲君は自分でなければならぬと思ひ、出征に際して允禔に言った、「皇父年高、好好歹歹你須時常給我信兒。這個差使想来

是我的」と。^⑤

このため、胤禩は帝位を篡奪したと主張する学者は、允禩に兵符を統括させ、西北に鎮守させたことは、彼が将来皇帝になるのを玄燁が認めており、彼は当時朝野の人々が心を傾けた太子の候補者であると考えた。この問題に対して、私は違う意見を持っている。もし允禩が果して衆望の帰する所であり、一致公認の儲君であるならば、この期間、官僚たちが何度も皇帝に重ねて允禩に太子の地位を恢復するようにと願うはずはない。たとえば、康熙五十六年五月、大学士の王揆・御史の陳嘉猷ら数名。五十七年一月、翰林院檢討朱天保・副都統の戴保ら数名。六十年三月、王揆及び御史の陶彝ら十余人が皆そうである。^⑥すると允禩は朝野が心を傾ける皇儲ではないことが分る。もしそうでなければ、こんなに多くの反対者がいるはずがあらうか。

ある纂位説に反対の学者は、甚だしくも、允禩が出征の任を命ぜられたのは、玄燁がその朋党を分離させようとする策略であり、允禩が允禩らと過度に接近することを避けようとしたのであると考えられている。玄燁は、恐らく将来允禩のために「興兵構難、逼朕遜位」という「行同狗彘之阿哥」がいるだろうと嘗て話したことがあるが、允禩を指すのである。^⑦

実際には、どの皇子を継承人に選ぶかは、恐らく玄燁本人以外

には誰も分らなかったであろう。

- ① 《大義覺迷錄》卷一、頁二十。又卷三、頁二二。
- ② 《允禩允禩案》頁二九、《文獻叢編》七、台灣、國風出版社影印本、一九六四年三月。
- ③ 《清聖祖實錄》卷二三五、四七年十一月癸酉。
- ④ 《撫遠大將軍奏疏》頁三三、燕京大學圖書館藏傳鈔本。
- ⑤ 同註②、頁三十。
- ⑥ 《康熙朝起居注冊》、五七年一月二十日、中國第一歷史檔案館、一九八四年八月。又《清史稿》卷二二〇。又《清聖祖實錄》卷二九七、十六年三月丙子。
- ⑦ 史松：《康熙朝皇位繼承鬭爭和雍正繼位》、第一次全國清史學術討論會論文、一九八二年。

10

そうすると、康熙の晩年、允禩が突然大將軍に任命されたことは、一体どのように解釈すればよいのか。允禩が重く用いられたのは事実であるが、必ずしも儲君を立てることと関係があると私は思わない。

胤禩がかつて自己弁解するため、次のように言った。

……逆党乃云：…聖意欲伝大位於允禩。独不思皇考春秋已高、豈有将欲伝大位之人、令其在辺遠数千里外之理、雖天下至愚之人、亦知必無是事矣。①

この話は、説得力が強い。允禩は出征後、康熙六十年冬、一度都に帰ったことがある。その時、既に三年も外に居り、軍功も立てたが、老皇帝は既に六十八の高齢で、且つ体も衰弱して病気がちであるから、もし冊立の気持があったなら、この機会に允禩を太子にすると宣布するのが、最も良い時機ではなかっただろうか。だが都に滞在すること数箇月、全く皇帝の意志表示もなく、再び彼を前線へと帰らせた。その当時、擁護者の允禩は腹心の秦道然という人に言った、「皇父明是不要十四阿哥成功、恐怕成功後難於安頓他」②。

私は、玄燁が允禩を重く用いたことは問題ないが、必ずしも儲君の地位と一緒に結び付けて考える必要はないと思う。実際允禩が任命されたのは、全く軍事上の必要から来ているのである。彼がこの任務を委ねられる九箇月前に、玄燁は次のような話をして

去年欲拔一大臣、在甘州驻扎、辦理軍務。今額倫特既在西寧、諸事可以無虞。且自有軍機以来、凡事朕皆預為策劃調度、亦無不相符者。……其甘州地方甚屬緊要、須派大員在彼驻扎。③

このように允禩が命を受ける一年余り前、玄燁は大官を派遣して駐札させようと計画したが、額倫特がいたから、ここ暫らくは急ぐ必要はなかったのである。允禩には兵隊を統率する能力が頗る

あったので、終に彼を撫遠大將軍にして、西寧に駐札させ、辺敵に對処させると發表したのである。この軍隊派遣と皇位の繼承とは、別に大きな関連はない。

私はここに一つ新しい仮説をもっている。康熙帝の心中の嗣君は正しく胤禩であった。評価したのは、彼の品德(表面上の)と政治手腕であった。別な面では允禩も重視した。評価したのは彼の軍事的才能であった。それで胤禩を自分の後を継いで皇帝にさせ、強力な軍隊を擁する同母弟の允禩を輔佐するのは、最上の組み合わせではないだろうか。ましてや、胤禩はその他の兄弟達ともしっくりした関係を保っていたから、彼を嗣君にすれば、天下安寧無事に保つことができる。この理由もすじが通るかもしれない。かつて康熙帝が「朕万年後、必択一堅固可託之人、与爾等作主、令爾等永享太平」と言っているが、この人物はつまり胤禩を指しているのではなからうか。

- ① 《大義覺迷錄》卷三、頁一二三。
- ② 《允禩允禩案》頁七。
- ③ 《清聖祖實錄》卷二七七、五七年一月壬申。
- ④ 《清世宗實錄》卷一、卷首。

11

康熙帝が崩御し、雍正帝が帝位を継ぐとすぐに根拠のない風説

が流れた。皇位篡奪されたもので、遺詔中の帝位繼承人は胤禩ではなく、彼の十四弟の允禩であるというのであった。この件について、野史にはいろいろな説がある。

一、玄燁自筆の遺詔「十四皇子即繼承大統」とあるのを、胤禩は遺詔の在る所を探り当て、「十」字を「第」字に改めて継位することができた。

二、胤禩の生母は年羹堯と密通し、宮廷に入って八箇月して胤禩を産んだ。玄燁が崩御の時、年はひそかに詔を改竄し、胤禩を天下の主とした。

三、胤禩は若い時無頼であり、飲酒・擊劍を好み、康熙帝に悦ばれなかったので、外へ放浪した。皇帝が重体になった時、胤禩は劍客数人と都へ返り、遺詔を盗んで、「伝位十四皇子」という「十」字を「于」字に改めて帝位に立つことができた。

四、康熙帝崩御の時、大臣は隆科多一人だけであったので、隆科多は遺詔の「十」を「于」に改め、胤禩は帝位を継ぐことができた。

五、康熙帝が重体の時、隆科多の掌に「十四皇子」の文字を書いたが、隆科多が「十」字を舌でなめて消した(一説、手でぬぐい去った)ので、胤禩は帝位を継ぐことができた。

むろんこういった流言は事実無根である。たとえば、野史の中

では年羹堯が胤禩を助けて篡位したことを強調し、二人を呂不韋と秦の始皇帝の關係（つまり胤禩は年羹堯の私生児）であると書いてあるが、それはでたらめである。実際には胤禩は年羹堯より年長であるから、どうしてそのようなことがあり得ようか。年羹堯の伝記は多いが、彼の年齢に触れたものはなかった。私は朝鮮人李宜顯の《庚子燕行雜話》の中に次のような一文があるのを見つけた。

訳語来言、門外有一官人来到、欲見使臣云。……遊入、即年希堯、為名人。而向年来我國勅使羹堯之兄也。其弟羹堯方為四川總督。年今四十二、渠年五十五云。^①

朝鮮の使臣が中国に来たのは庚子の年で、康熙五十九年である。当時羹堯は四十二歳であるから、数え年で計算すると康熙十八年に生まれたはずである。胤禩は康熙十七年に生まれているので、羹堯より丁度一歳上である。文中に羹堯がかつて彼の國に使者として赴き、その時四川總督に任ぜられていたというのも史実と一致する。それなら年齢に関する記載も信じられない理由はない。それ故野史に、「呂氏居奇、私乱謀立」と言うのは、全く「痴人説夢」なのである。

こういって流言は荒唐無稽であるが、それなりの原因があり、胤禩の政敵允禩・允禩らが捏造し広めたものであるという。これ

について胤禩がかつて自ら上諭を書いて駁論したものが、《大義覺迷錄》の中に収められている。

雍正六年、湖南省の読書人曾靜が總督の岳鍾琪に謀反を唆した事件があった。上述のこの書中に収録されたものが胤禩の自弁文と曾靜らの供述及び懺悔録であった。書中に言う。

据曾靜供称：伊在湖南、有人伝説：「先帝欲將大統伝於允禩。聖躬不豫時、降旨召允禩来京、其旨為隆科多所隱。先帝賓天之日、允禩不到。隆科多伝旨、遂立当今。」

これらの流言をまき散したのは、允禩・允禩らの太監であつて、彼らは罪を獲て広西に流され、その道中流言を流し広めた。供述には載せている。

訊掘逆賊耿精忠之孫耿六介供称：「伊先充發在三姓地方時、於八宝家中、有太監于義・何玉柱向八宝女人談論：『聖祖皇帝原伝十四阿哥允禩天下、皇上將十字改為于字。』又云：『聖祖皇帝在暢春園病重、皇上就進一碗人參湯、不知如何、聖祖就崩了駕、皇上就登了位。』」

《大義覺迷錄》は雍正七年に頒布されたので、流言が広められたのは、雍正の初年である。《永憲錄》の記載によると、太監の何玉柱らが三姓地方へ流されたのは、胤禩が即位して十日余りの十二月三日であつた。^② それなら、詔をいつわって位を奪ったとい

う風説が最初からあったと言つてよい。私は更に朝鮮史料を用いて証明できる。清代、中国と朝鮮との関係は密切で、清皇室の結婚・喪礼・冬至・新年・万寿及び新主の冊封には、朝鮮は必ず使節を派遣し、朝賀したり、線香を供えて礼拝に来たりした。これらの使臣及び随員は、往々そのついでに、清政府の動態・民間の情況を探つて、帰国後報告した。この度、朝鮮は謝恩使の全城君李混と副使李万選を中国に派遣して来た。康熙六十一年冬出發し、中国に着いた時に康熙帝が崩御したことを知り、十二月四日日本国に向けて、書面の報告を發した。少し後、また報告一通を追加して云つた、「聖祖（六十一年）十一月十三日崩、新君二十日始頒登極詔。以此或称秘不發詔、或称矯詔襲位、似是事实」と。

更に雍正元年九月、雍正帝の即位を祝賀しに来た正使の密昌君織らは帰国して報告して云つた、「雍正繼位、或云出於矯詔」と。

このことから篡位説は胤禛の即位したのとほとんど同時にあつて流伝したと分る。

矯詔説が既に遠く海外で起つた以上、中国の役人は黙つておれず、訃報を伝える勅使の額真那・吳爾泰は十二月十六日に朝鮮に到着し、噂を打ち消したようだ。というのは翌日、朝鮮の遠接使金演は通訳から聞いた話を中央政府の戸曹判書である李台佐に報告したからである。

康熙皇帝在暢春園病劇、知其不能起、召閣老馬齊言曰：「第四子雍親王最賢、我死後立為嗣皇。胤禛第二子有英雄氣象、必封為太子。」仍以為君不易之道・平治天下之要、訓戒胤禛。解脫其頭項所掛念珠与胤禛曰：「此乃順治皇帝臨終時贈朕之物、今我贈爾、有意存焉、爾其知之。」

この史料にはいくつかの問題がある。一、「胤禛第二子」と言うのは、もちろん後の乾隆帝弘曆を指す。ただ当時彼はわずか十二歳なので、どうして「英雄氣象」があると見て取れようか。弘曆が太子に指名されたのは次のようである。胤禛は「密建皇儲法」を創立した。彼は雍正元年八月、将来の継位者の名前をきちんと書いて錦の箱に収め、乾清宮の真中の「正大光明」の匾額の後に蔵し、彼の死後になつてあけるがよいと声明した。それでどの皇子が書かれていたのか誰も知らなかった。もしかまだ書いていないのに、外国でさえも知っていたのなら、公然の秘密になつたのではないか。もちろん官書中にも、康熙の末年、玄燁とその孫弘曆との間に深摯な感情のあつたことを記述している。康熙六十一年春、弘曆は始めて円明園でその祖父に謁見した。康熙帝は一見するなり寵愛し、直ちに宮中で養育するように命じ、自ら勉強の面倒を見た。更にその叔父の允禧・允祿について武芸を学ぶように命じた。この年の秋、熱河に巡幸し山荘で避暑をした際、弘曆も

随行している。木蘭狩獵場で狩をした時、弘曆は熊に襲われたが、玄燁は鉄砲で熊をうち倒し、帳の中に入った後、温惠皇貴太妃に言った、「是命貴重、福將過予^⑧」と。

上述の種々の事柄は事実なのか、それとも胤禛の工作なのか。

前者であるなら、それは彼が帝位継承者に選ばれた一つの理由であり、もし後者なら、弘曆に関する伝説はどのようにして広められたのか。もし誇張宣伝の意図があるならば、康熙帝が崩御する前に、胤禛はもちろんでたらしめを言おうとするはずはあるまい。

中国の使者が朝鮮へ行ったのは、皇帝崩御後わずか一箇月のことであり、康熙帝は孫の弘曆が可愛いかったので帝位を胤禛に伝えただけという噂がするように速く伝わるはずはない。

それなら使者が出発に際し新皇帝の委嘱を受けて、発言したのだろうか、これも事実ではない。というのは当時遺詔を受けた大臣は隆科多だったにもかかわらず、通訳は馬齊だと言っており、もし本当に新皇帝が委嘱したという事があるなら、そのように事実と違ってくるはずがない。それで私達は康熙帝の弘曆に対する寵愛も事実かも知れぬとしか言えない。ある学者は康熙帝は他の孫達をも一様に好いていたから、これが太子を冊立する条件になりえないと考える^⑨。ここに一言つけ加えると、使者の一人、吳爾泰はもともと允禩・允禩の同党人であり、道理からして、彼が胤

禛のために美しい物語を編み出すはずはないのである。

次に隆科多が何故に馬齊に変わったのか。皇位伝授の際の詳細は、勅使や通訳さえはつきり知らなかったもので、このようなちぐはぐな推測が生まれたのだと分る。

それに念珠をはずして意を托した事は事実ではあり得ない。というのは胤禛がその後自分の即位が合法であることを自己弁護する際、この件をもち出したことがないからである。もし実際にそのようなことがあったのなら、即位が合法だという有力な証拠になるのでとくに堂々と公開しているはずである。

要するに、清史を研究する者は一方では朝鮮の史料を重視すべきである。というのはそれは中国のものより更に客観的で信頼できる所があるからである。しかし、利用する時には注意しなくてはならない。というのは、その中に誤った情報が少なくないからである。たとえば、雍正帝が死に乾隆帝が継位した時には、波風が立たず平静であり、非常にスムーズに進んだのであるが、朝鮮の史料では中国に、「有擁兵争立之挙」、「有乱必矣」などと誤報があるのである^⑩。

① 朝鮮《燕行錄選集》下、頁四九二。

② 《大義覺迷錄》卷三、頁一二一。

③ 同上。

- ④ 蕭爽：《永憲錄》卷一、頁六三。
- ⑤ 朝鮮《景宗實錄》、二年十二月乙卯。
- ⑥ 《同文彙考》補編、「使臣別單」卷四。
- ⑦ 同註⑤三年九月丙戌。
- ⑧ 同上二年十二月戊辰。
- ⑨ 康熙帝が弘曆を寵愛したことは、《清高宗實錄》巻首に見える。また、昭樞《嘯亭雜錄》巻一「純皇初政」条にも見える。稲葉君山《清朝全史》の中でも言及されており（四十八章、十三頁）、結論にはある歴史家の「康熙帝はこの孫を愛するが故に皇位を胤禛に伝える」という言葉を引用している。このある歴史家とは誰を指すのか定かでない。
- ⑩ 楊珍：《關於康熙朝儲位之爭及雍正繼位的幾個問題》頁一〇八、《清史論叢》第六輯、一九八五年六月。
- ⑪ 朝鮮《承政院日記》八〇八冊、英祖十一年（雍正十三年）九月十三日。

12

朝鮮の史料や野史に「矯詔篡立」の事が述べられているが、実際には実行しがたい。というのは「伝位十四皇子」を「伝位于四皇子」に改めたというのは、一見すると理にかなうようだが、清の宮廷の習慣に合わないからである。一般には「皇四子」、「皇十四子」と称したので、もし遺詔が「伝位皇十四子」と書かれれば、どのようなであれ改竄のしようがないのである。

実際皇位の継承に関して、雍正帝と彼の十四弟との間にはもっ

と曲折した問題がなお存在する。上文で皇十四子のもとの名は胤禵であったが、兄胤禛が即位した後、避諱によって允禵と易えたと書いた。確かにほとんどすべての官私の文献にはこの名前が出てくる。しかし実際には、これは彼の本当の名前ではない。本当の名前は「胤禛」であった。多分「胤」を易えて「允」にしたと同時に、「禛」も「禵」に改めたのであろう。これはもちろん新皇帝胤禛の命令によるのである。この改名の事は、允禵の息子弘旺が著した《皇清通史綱要》の中に明らかである。その上確実な証拠がまだある。《撫遠大將軍奏疏》は、現在も残っていて、奏疏中に用いられている名は「胤禛」であって、「胤禵」ではない。^①

これは矯詔説と関係がある。というのは「禛」を「禵」に改めるのは、「十」を「于」に改めるのよりも確実なもので、篡位を主張する学者から言えば、これは比較的有力な証拠になる。この十年来、オーストラリア大学の金承芸教授は改名についての意見を最も多く出しているが、^②もちろんこのことを指摘する学者は早くからあり、例えば張爾田氏は《答梁任公論史學書》で、「改禛為禵固自易易」と述べ、朝鮮の方でも雍正初年にはもうこの種の伝説があった。

十四皇子の原名は胤禵であり、後に允禵と改めたのは避諱のた

めであって、兄弟も同様に改めており、少しも問題がない。しかし、原名は禎であるのに、何故禎と改めたのか。多分禎と禎とは字形・発音が近いからであろう。禎は「之人」の切で、音は *zhen* で真韻に属する。禎は二つの読み方がある。一つは禎と同じ。もう一つは「知盈」の切で、音は *zhen* で庚韻に属する。

両者の名前があまりに似ているので、胤禩は即位後、その弟の改名を命じた。これは篡位とは関係ない。だがこういった改名の措置は体裁がよくないので、公開しなかったし、記録にも残さず、官書中の禎をすべて禎に改めた。しかし、いくら注意しても手ぬかりはあるもの、《聖祖御製文集》と《撫遠大將軍奏疏》中ではまだもとの姿をとどめている^③。

金氏の「易名篡位」説に関して私は上掲の拙著第三章で詳細に反論を提出したので、ここでは再説しない。それから南開大学の馮爾康教授もかつて論文を書いて「易名篡位」について金氏の説を批判した。大変説得力があつて参考になる^④。

しかし馮氏には別に関係の文章があり、《康熙十四子胤禩考釈》と題し^⑤、新しい意見を出した。それは十四皇子のもとの名は胤禩であり、後に康熙帝に胤禩と改められ、雍正帝が即位した後、またもとの名に戻したというのである。この点には私は同意しない。馮氏が利用したのは第一級の資料の玉牒であるが、私も北京の第

一歴史檔案館で玉牒を調べて、反対の意見を提出し、一九八五年十月、北京で開かれた清史国際会議で取りあげた。この論文は間もなく出版されるので、ここでは再びくり返して贅言することはない。

① 《明清史料》丁編に《給撫遠大將軍王胤禩書稿》及び《大將軍王胤禩題稿》各一篇に収める。また《清史資料》第三輯にも一部分を収める。

② 金氏が著した篡位についての論文は、以下の三篇がある。

甲、《從胤禩問題看清世宗奪位》、《近代史研究集刊》第五期、台北、中央研究院、一九七六年六月。

乙、《胤禩：一個帝夢成空的皇子》、同上第六期、一九七九年六月。

丙、《胤禩、非清世宗本來名諱探討》、同上第八期、一九七九年十月。

③ 註①中に、胤禩の名が見える。また《清聖祖御製文集》第三集にも胤禩の名が見える。

④ 馮爾康：《清世宗本叫胤禩、並未盜名》、《南開學報》、一九八二年第一期。

⑤ 馮爾康：《康熙十四子胤禩考釈》、《歷史檔案》第四期、一九八一年。

13

胤禩の帝位継承はそれが合法であろうとなかろうと、当時の人から見ると意外であった。一旦は、滿漢の文武大臣の一致した擁戴を得て実力を持っていた八皇子の允禩、康熙の晩年大將軍に任命されて兵権を握り、人望の極めて高かった十四皇子の允禩、年

胤は胤禩の上に在り、学問教養のあった三皇子允禩は皆あてがはずれて、番狂わせとなった。

胤禩は野心家であり、帝位への執着よりは諸兄弟に劣らなかつた。秘密史料には彼は早くから継承工作のためにこっそりと手を打ったが、表面上無欲を装い、何度も儲君に就く考えはないと言つて父皇をだまし、諸兄弟もあざむいた。今や彼が当選したことは、意外中の意外ではなからうか。皆はもちろん不服であり、特に允禩・允禩の集団は二十年も画策したのにそれが水の泡となつたので、その失望・怨恨は想像に難くなく、すぐに表出した。允禩はどうか、「聖祖皇帝賓天時」「並不哀戚、乃於院外倚柱独立癡思。派辦事務、全然不理、亦不回答、其怨憤可知」と。

允禩はどうかと言えば、「皇考升遐之日、朕（胤禩）在哀痛之時、塞思黑（允禩）突至朕前、箕踞对坐、傲慢無礼、其意大不可測」^②。その後、允禩は手紙を書いて允禩に与え、その中に、「事機已失、悔之無及」の語があつた。^③

允禩はどうかというところ、胤禩は言う、「允禩將到京之時、先行文礼部、詢問朕儀注、拳朝無不駭異。及到京見朕、其拳動垂張、詞氣傲慢、狂悖之状、不可殫述。」と。

允禩は、「隆科多奏：『聖祖皇帝賓天之日、臣先回京城、果親王（允禩）在內值班。聞大事出、与臣遇於西直門大街、告以聖上紹登

大位之言。果親王神色乖張、有類瘋狂。聞其奔回邸第、未在宮迎駕伺候。』であつた。^④

以上は胤禩が帝位を継いだと聞いて、諸弟の態度が異常であつたことの描写である。当然胤禩もこのような状況をよく知つていたので、帝位に登ると、高官・厚爵で人心をまるめこんだ。彼が最も扱にくい政敵は允禩であつて、康熙帝が崩御した翌日、総理事務大臣に任命した。間もなくまた允禩を廉親王に封じた。その他の兄弟も順次封爵された。たとえば、十二弟の允禵は多羅履郡王となり、十三弟の允祥は怡親王となり、十七弟の允禩は多羅果郡王となつた。兄弟の子達にも封爵があつた。たとえば廃太子允禩の子弘皙は理郡王に封ぜられ、七弟の允祐の子弘曙は世子となり、八弟允禩の子弘旺は貝勒となり、十四弟允禩の子弘春は固山貝子となつた。

単にこのようであつたのみならず、昔康熙の時代に允禩の党人だと指摘された貝子の蘇努も、父皇崩御三日後に爵が貝勒へ上つた。蘇努の子勒什亨は領侍衛内大臣となつた。別の二名の允禩の仲間、一人は鄂倫岱で、胤禩が帝位に即いた後、正藍旗都統を授けられた。一人は阿爾松阿で、雍正元年、刑部尚書に任命された。官を賜い、爵を贈ると同時に、胤禩は分化政策を実施し、朋党を結んで助け合う兄弟を分散した。允禩は活仏胡土克圖の靈寵を

送って行くように命ぜられ、塞外へと赴いた。允禩は湯泉へ派遣され、聖祖の景陵を守護した。彼らは皆新皇帝の腹心の殿しい監視下に在った。台北故宮博物院の秘檔に三里屯の守将の李如栢が、絶えず允禩の行動を報告した密摺があり、そのことが窺える。

- ① 《清世宗実録》卷四五、雍正四年六月甲子。
- ② 《大義覚迷録》卷一、頁十三。
- ③ 《清世宗実録》卷四十、雍正四年一月戊辰。
- ④ 《大義覚迷録》卷三、頁二二三。
- ⑤ 《上諭八旗》、雍正八年五月初九日。
- ⑥ 莊吉発：《清世宗拘禁十四阿哥胤禩始末》、《大陸雜誌》四九卷二期、一九七四年八月。

14

胤禩は帝位を継いだ後、政争を終結し、諸兄弟及びその党人を保全しようという意図があったようであり、これは上述した一連の行動から窺い知れる。かつ、帝位に上った詔の中で言っている、「朕之昆弟子姪甚多、惟思一体相関、敦睦罔替、共享昇平之福、永圖磐石之安」と。

即位した当初も諸兄弟を養心殿に召集し、痛哭流涙して諸兄弟に勸諭した。

於朕所不能者、輔之助之、於朕所錯誤者、規之諫之。朕便有

過失、亦当諒之隱之。

だが兄弟・臣僚らは皆協力せず、「百日之内、淆乱朕心者百端」であった。このため、三箇月後、彼はまた声明を出し、諸兄弟は共に「太平之福」を享受できるのであり、「朕並無此時姑且容認、待一二年後、漸加殺戮之心」と言った。

しかし口ではこう言っているものの、最初の数年間、肉親・宗親・官吏らは前後して黜責・降級・削籍・監禁・充軍の目に遭い、甚だしい者は死刑に処したり、或いは死後追罪となった。

これは彼の心と口とが一致せず、言ったことを守らないということであろうか。帝位を継いだ当初、人心を安定させるために、高官・厚爵でまるめ込み、時局がほぼ安定すると、次第に肅清し、禍根を根絶したのかもしれない。これはもちろん可能性がある。実際、政敵が一人一人と倒れていったが、その中で允禩・允禩の惨死が最も残酷である。

允禩は最初親王に封ぜられ、国家の要務を担当したが、間もなく誹責に遭った。彼は昔、「虚偽詐孝」、「認問宗室」、「素行陰險狡詐」であった。今は「欲触朕之怒、多行殺戮、使衆心離散、希圖擾乱国家」である。

雍正四年二月、終に皇族を追放され、更に「罔禁高牆」という刑に処された。三月、侮辱的意味あいを持つ名——阿其那に改め

られ、彼の息子弘旺も名を菩薩保と改めた。雍正四年九月十日、獄中に死んだ。《清史稿》には云う、「(四年)九月、允禩患嘔噦、命給与調養。未幾卒於幽所」^⑩と。当然これは普通の病死ではない。

允禩も同じような運命に出くわし、先ず西寧へ派遣され、後しばしば譴責を受けている。雍正四年正月、籍を削られ親族からはずされ、五月にはやはり侮辱の意味あいを持つ名——塞思黒に改められた。雍正帝は彼を都に送って処罰するように命じたが、保定に着いた後、暫らく当所に拘禁するように命じている。四年八月二十四日允禩は死んだ。彼の死については、台北故宫博物院の秘密檔案の中に詳細を極めた報告書がある。当時、主管者の直隸総督李紱は雍正帝に迎合するために、允禩に非人間的な待遇を与えた。彼は雍正四年、皇帝に上奏した何通かの秘密奏摺の中で云っている。

現在給与塞思黒飲食、与牢獄重囚無異。鉄索在身、手足拘繫。房小牆高、暑气酷烈、塞思黒昨已報中熱暈死、因伊家人用冷水噴漬、踰時始甦、大約難以久存。

至八月初九日以後、飲食所進甚少、形容亦日漸衰瘦。……至二十五日、声息愈微、呼亦不応。至晚更覺危篤。塞思黒業已昏迷不知、不能転動。目暗語暗、唯鼻息有氣、両手動揺、喉間有痰响而已。似此危篤、難以久延。……

間もなく李紱は終に密かに報告した。「塞思黒於本月二十七日卯時已殛身故」^⑪と。

允禩の死に様はこのように悲惨であった。上述の允禩の待遇もこれと同じであったと思う。胤禩が弟を殺したのは事実であると信ずる。清代の最後の天子宣統帝の弟溥儀は言っている。彼が幼い時、その兄皇帝の渾儀と養心殿で遊んでいて偶然、雍正帝の弟(允禩・允禩)を殺せという密旨を発見したと。これに関して、私は若干の疑問を感じ、溥儀氏を北京の邸宅に訪ずれ質問したことがある。その時討論したことについては、別の論文で詳論するので、ここでは贅言しない。

⑫ 允禩・允禩は殺戮される運命を逃れたけれども、ずっと監禁生活を送り、乾隆帝が即位した後、やっと釈放された。

- ① 《上諭内閣》康熙六十一年十一月二十日。
- ② 《大義覺迷録》卷三、頁二八。
- ③ 《上諭内閣》雍正元年二月十日。
- ④ 《清世宗実録》卷十二、雍正元年十月丁卯。
- ⑤ 同上卷十四、元年十二月丙午。
- ⑥ 同上卷十八、二年四月庚戌。
- ⑦ 同上卷二十、二年五月壬戌。
- ⑧ 同上卷四十、四年一月戊戌。又卷四一、四年二月癸酉。
- ⑨ 同上卷四二、四年三月甲辰。
- ⑩ 《清史稿》卷二〇、理密親王允禩伝。

⑩ 《允禩允禩案》頁十五、十七、李紱密摺。

⑪ 于友發：《蕤心殿風波》（《由皇帝到公民》）中に、溥儀（宣統帝）・溥傑兄弟が幼い時蕤心殿中で偶然康熙帝の十四皇子継位の遺詔を発見したということが述べられている。このため、社会科学院歴史研究所の薛瑞録氏が溥傑氏を訪れ、当時彼らが見たものは遺詔ではなく、雍正帝の弟殺害を命ずる密詔であることがわかった。以上の事は薛氏が《清史通訊》一九八三年第二期に発表している。私は前からこの問題に関心を持ち、また薛氏の文中に拙著に触れた箇所もあるので、一九八五年夏溥傑氏を訪問した。これについては別に拙論があり、ここでは触れない。

15

康熙の晩年の諸皇子の帝位継承の紛争は、本来雍正の改元により一段落を告げるはずであったが、ところが逆に鬪牆げききょうの惨劇を醸成したのであった。人々は兄弟げんかの罪を胤禩の残酷さに帰し、甚だしきはこれは帝位獲得が不正である証拠であって、彼は高圧的な手段で衆人の口を箝制しようとしたのだとさえ言う。だが実のところ、その言い方は正しくない。私達は清の太祖ヌルハチ以来の一族分権の形態が依然存在し、とりわけ康熙晩年の儲位が宙に浮いて、諸皇子がそれぞれ、党派を立てて権力を争った情況を認識すべきである。これは康熙帝が残した余毒であると言ってよい。彼が儲君をもうけた時には、清初の旧習を襲い、前後して諸子を

王に分封し、同時に政事に参与させた。かくして皇帝と儲君、儲君と諸王間の矛盾が表面化し、そのまま雍正時代まで残されて、胤禩の即位後も、兄弟たちは臣服することに甘んぜず、消極的な対抗をなし、このまま行けば、政変を惹起しないとも限らないのである。胤禩は断乎として悪辣な手段を採り、次第に肅清していったのである。その上、当時諸弟の態度を見るに、允禩が廉親王に封ぜられた時、彼の妻は祝賀する客に言った。「有何喜可賀、恐不能保此首領耳」と。^⑫

允禩は胤禩が即位した当初、左右の者に言った。「不料事情竟至如此、我輩生不如死」と。^⑬

前文に述べたように、允禩も西寧から都へ召還された時、胤禩に対して「慳蹙妄行、状類棍徒」であった。

このようであったばかりでなく、年羹堯は雍正初年に一番寵愛された人であり、允禩が遠く西寧に移った時、年羹堯は命を受けて監視することになったが、実情を報告せず、逆に允禩と書札を密かに通じた。^⑭

その他、允禩・允禩らの太監が至る所で胤禩は父を毒殺して帝位を奪い、兄弟を殺戮したという流言をまき散らしたので、胤禩は非常に心理的な脅威を感じ、ついに暗殺されるのではないかと疑って寝食不安に陥り、次のように漏らした。

以皇考之神聖、猶防允禩等之奸惡、不能一日寧處。朕身視皇考何如耶。且於皇考則為父子、於朕則為兄弟。父子与兄弟、相去甚遠^⑤。

彼は允禩・允禩らの陰謀を防ごうとして、遠行もできないまでに至った。彼は言う。

蓋以朕兄弟阿其那・塞思黑等密結匪党、潛蓄邪謀、遇事生波、中懷叵測、朕実有防範之心、不便遠臨邊塞^⑥。

この事から胤禩は禩・禩らに対し深く警戒心を抱き、政敵が消えなければ一日たりとも安心して眠りようがなかった。このため、雍正初年の肅清殺戮は政治闘争であって、必ずしも篡位と関係がある訳ではない。

- ① 李憲先・白新良：《康熙之際藩閥制度的演變》、《社会科学叢刊》、一九八三年第二期。
- ② 《清世宗實錄》卷四十、雍正四年一月戊戌。
- ③ 《大義覺迷錄》卷三、頁一二九。
- ④ 《允禩允禩案》頁十四。
- ⑤ 《上諭內閣》雍正二年四月初七日。
- ⑥ 同上四年十月初二日。

康熙帝の死について、胤禩が毒殺したのであり、その目的は帝

位の篡奪であると言う学者がいる。当然これは政府の文獻中には何の痕跡も露れていない。私達は先ず《東華錄》を見てみよう。

康熙六十一年十一月戊子（初七日）、上不豫、自南苑回駐暢春園。庚寅（初九日）、上因聖躬不豫、十五日南郊大祀、特命皇四子和碩雍親王（即ち後の雍正帝）恭代。

甲午（十三日）丑刻（一至三時）、上疾大漸、命趣召皇四子於齋所、諭令速至。……寅刻（三至五時）、召皇三子誠親王允祉・皇七子淳郡王允祐・皇八子貝勒允禩・皇九子貝子允禩・皇十子敦郡王允禩・皇十二子貝子允禩・皇十三子允禩・理藩院尚書隆科多、至御前諭曰：「皇四子人品貴重、深肖朕躬、必能克承大統、著繼朕登基、即皇帝位。」

この記述は非常にはっきりとしているので、胤禩はその後自分のために弁護する時にはこれを根拠とした。「伝位於朕之遺詔、乃諸兄弟面承於御榻之前者、是以諸兄弟皆俯首臣伏於朕前、而不敢有異議」^①と。

だが、諸兄弟が共に遺詔を受けた云々の上諭は雍正七年に頒布されているが、継位した当初のいくつかの上諭の中には記されていない。たとえば雍正元年八月十七日、滿漢の大臣を諭して、ただこう言っている。

聖祖仁皇帝、為宗社臣民計、慎選於諸子之中、命朕繼承統緒、

於去年十一月十三日、倉猝之間、一言而定大計。^②

また、雍正二年八月二十二日の上論には言う。

前歲十一月十三日、皇考始下旨意。朕竟不知、朕若知之、自
別有道理。皇考賓天之後、方宣旨於朕。^③

雍正五年になって、やっと諸兄弟が共に遺詔を受けたことを明か
した、曰く、「皇考升遐之日、召朕之諸兄弟及隆科多入見、面降
諭旨、以大統付朕」^④。このため、諸皇子が共に遺詔を受けた事
を否定する学者がいて、このような事は全くなかったのだと思っ
ている。

私は、諸皇子が共に遺詔を受けたことは、胤禛から言えば、継
位合法の最も強い証拠であると思う。彼は何故雍正五年になって
やっと公にしたのか疑惑なしとはしない。だが、このような解釈
もできよう。もし継位が合法であるなら、この話を持ち出す必要
はないのであって、その後、彼は篡位したのだと指摘する人がい
るのを見て、始めてもち出して反証としたのである。これ以前の
上論の中では諸皇子が共に遺詔を受けたことに言及してはいない
が、それはこの事を否定するものではない。

- ① 《大義覺迷錄》卷三、頁一二。
- ② 《清世宗実録》卷十、雍正元年八月甲子。
- ③ 《上諭内閣》雍正二年八月二十二日。
- ④ 《清世宗実録》卷六二、雍正五年十月丁亥。

17

このように言くと、胤禛の継位は人に疑念を抱かせる点を残さ
なかつたというのであろうか。必ずしもそうでもない。いくら考
えても納得し難い記録がある。これは上に引用した《東華錄》の
「著繼朕登基、即皇帝位」の後にすぐ続くものである。その文に
言う。

皇四子聞召馳至。巳刻（九至十一時）、趨進寢宮。上告以病勢
日臻之故。是日、皇四子三次進見問安。戌刻（十九至二十一時）、
上崩於寢宮。（《清聖祖実録》、《清世宗実録》もほぼ同じ。）

この記載は確かに曖昧ではつきりしない。これについて早くも五
・六十年前、孟森氏は彼の名著《清世宗入承大統考実》の文中で
疑問を提出している。それには云う。

《実録》所書世宗得嗣帝位之由、以受聖祖之末命。聖祖末命
在崩御日之寅刻、至巳刻而世宗入寢宮、臨病榻、聖祖尚能告
以病勢日臻之故、則其語必甚詳、非病革不能發言情狀。又自
寅至戌、歷時凡八、其間已宣露天位之有屬、豈不声聞於外、
道路皆知。……

続いて孟氏は《大義覺迷錄》中の雍正七年九月の上諭を引用する。
……及朕馳至問安、皇考告以症候日增之故、朕含淚勸慰。其

夜戌時、龍馭上賓。朕哀慟号呼、実不欲生。隆科多乃述皇考遺詔、朕聞之驚慟、昏仆於地。

孟氏は評して言う。

拠此則伝位之遺詔、世宗於聖祖既崩之後、始由隆科多述而知之、而謂隆与諸皇子同以是日寅刻受詔、在世宗未至寢宮之前何以既至以後、聖祖方口語便利、能縷述病勢日臻之故、而不一及付託之意乎。且是日世宗三次進見問安、則舒緩如平時之微恙護視、絕非將屬續時拳扶迫切之態、聖祖可以自達其意之機會甚寬、而竟以大位相授一事、遺忘不語乎。抑未絶之頃、猶守秘密而不告本人乎。若云秘之、則諸子知之矣、隆科多知之矣、独不使受遺之人得知、此豈在情理之内^①。

孟氏の全文は胤禛の帝位獲得が不正であることを指摘している。これに関して、拙著『雍正帝及其密摺制度研究』の第三章中に駁論を提出した。孟氏は論拠不足で頗る独断曲解があると考えたのである。ただ上に引いた一節だけは、さすがに孟氏のもつ独自の見識であって、史料の食い違ひの中に問題を掘り起したと思う。次に孟氏が取り上げた問題を整理すると以下のようになる。

一、《東華錄》、《實錄》などは胤禛の継位は聖祖の遺命から出ているという。つまり、康熙帝の臨終直前の口頭の遺言であるけれども、《大義覺迷錄》では遺詔と言っている。この点に関して、

私は深く穿鑿しなくてよいと思う。というのは、口頭の遺言がもし筆録されるなら、遺詔となるからである。しかし以下のいくつかの問題は、誠に孟氏の説くようにどのようにしても解釈できない。たとえば、

二、康熙六十一年十一月十三日朝寅の刻、大臣隆科多と七人の皇子が共に召されて康熙帝の御榻の前に至り、皇帝は皇四子の胤禛を継位させると宣布した。しかし、巳の刻、胤禛は宮中へ馳せ参じ、父子は相い面会し、継位の事に関しては避けて話さなかった。その上、この時から皇帝が崩御する戌の刻まで、合計五刻、つまり十時間あって、胤禛は三度も寢宮に入り安否を問うたが、皇帝はなお頭腦明晰で、自ら病状を述べることができた。それが何故にこの間もなく後継者となる人の前で、最も重要な皇位授受について、一言すらもち出さなかったのであろうか。もし秘密を守るためだというのなら、諸兄弟はとくに知っているのに、皆が固く口を閉ざして言わないということがありうるのか。この点に関して、馮爾康氏は次のような一つの仮説を出している。

胤禛説他十三日晋謁乃翁、還作了交談、康熙為什麼不当面宣布立他為儲君、何勞隆科多傳達。這事有点奇怪、是否他在製造謠言、其実、這種事說怪也不怪、康熙多年不立、也不准立太子、如果面封胤禛、就不符合他的做法、他可以要求等他死

後再行宣布^②

私はこの意見に賛成しない。確かに康熙帝は二度太子を廃立した後、儲君を立てることに對して、消極的になったようであり、かつて言ったことがある、「宋仁宗三十年未立太子、我太祖皇帝並未預立皇太子、我太宗皇帝亦未預立皇太子」と^③。しかし、こうは言っても、彼は儲君を立てることを全面的に否定した訳ではなく、「建儲大事、朕豈忘懷、但關係重大、未可輕立」と言っている^④。彼は別に儲君を立てることを放棄しておらず、慎重に選択しようとしているだけであつて、ただ立てた人が適當でなく、また同じ轍を踏んで、皇權と儲權との對立を引き起すことを恐れているのである。彼は少し後に、大臣らに命じて、漢唐以来の各時代の典禮を参考にして、太子の儀禮を制定させた^⑤。これは太子を冊立する準備であると言つてよいから、康熙帝は儲君を立てることを許さなかつたというのは、正しくないのである。

その上、今既に非常時に至つたのであるから、もし皇帝が危篤でなければ、皇子や大臣に宣布するはずがない。儲君の件は既に決まつたことであるのに、何故にただ本人にのみ知らせることができなかつたのか、これはすじの通らない事である。

- ① 孟森：《清世宗入承大統考実》（孟氏が著す《清代史》に収めている）
 ② 馮爾康：《雍正傳》、人民出版社、一九八五年九月。

- ③ 《清聖祖實錄》卷二五三、康熙五二年二月庚戌。
 ④ 同上。
 ⑤ 同上卷二七七、五七年一月庚午。

18

総て言うると、雍正帝胤禛の継位は確かに人に指摘されるような疑問点を残した。その中で重要な一つは皇位授受の説明であつて、前後の辻褄が合わない感じがかなりする。これも胤禛が自分で賢いと自惚し、好んで雄弁をなした結果である。「多言は失言のもと」、言葉数が多いと必ず矛盾に満ちているものである。たとえば、詔を矯つて篡立したり兄弟を殺戮したりなどの事は、本来外部にそれほど広く流れなかつたのであるが、彼自身が舌や筆を大いにふるつて文章を著し、自分のためにうわさを打ち消そうと、《大義覺迷錄》の中に収め、全国の学生に命じて暗誦させた結果、隠そうとしてかえつて馬脚を露わすことになつたのである。それで彼の息子乾隆帝は、帝位に登るとすぐに命令してこの書物を回収させ、これ以降それは禁書となつた。しかし、現在《大義覺迷錄》は再び世に出て、学者達が胤禛を攻撃する好材料となつている。

胤禛のもう一つの欠点は、自分を完全無欠な聖主に作りあげよ

うとしたことであり、彼が《殊批論旨》を出版した目的は、死後の評価を確定することにあつた。^① 彼は何度も言っている、「非敢以功德企及古先哲、而惟此勤勉之心、自信可無忝於古訓」^②、「自古有志之人、豈有不願声名美善之理」^③と。彼は兄弟達に「同心匡弼」、「使朕成為一代之令主」であることを求めた。^④

まさしく彼のこのような名声を求めらるることに急である態度が、逆に前後の辻褄が合わないという虚偽の状況を造り出した。皇位授受の際に、諸兄弟は遺詔を聞いたのに、ところが彼自身は何故少しも知るところがないのか。次のような解釈ができるかもしれない。その頃彼は何度も儲位を望む気持ちは毛頭なかったと強調している。それで最後には更に劇的な物語——つまり康熙帝の臨終以前に、彼は継位者が誰であるかを全く知らず、関心もなかったが、皇帝が崩御し、隆科多が遺詔を宣読すると、予想外だとし、「朕聞之驚慄、昏仆於地」という物語を造り出した。^⑤ もともとこれは彼の誠孝、恬淡を強調することにあつたのだが、これが

逆にその後彼の算立を指摘する格好な材料になるとは全く考えてもみなかった。

① 拙著：《雍正帝及其密摺制度研究》頁一九〇～一九一。

② 《雍正殊批論旨》卷首上論。

③ 《清世宗実録》卷四四、雍正四年五月戊申。

④ 《大義算迷録》卷三、頁二二八～二二九。

⑤ 同上卷二、頁十一。

19

私に再度冒頭の意見——いわゆる「雍正算位」は千古の疑案にならんとしている——を繰りかえさせてもらいたい。というのは、現存の史料に基づけば解決のしようがないからである。私は彼の即位の合法化のために弁護する気持ちはない。私は賛成・反対両方面の論拠を皆考慮すべきであると考え、私が提出したいいくつかの解釈も一つの問題の別な見方にすぎないのである。

(經路殊協太学外国語学部教授)